「個別最適な学び」のすすめ～情報Ⅰ授業実践～

森村学園高等部 主幹教諭
髙田 昌輝

1. はじめに

現代の教育課題に対応するために，「令和の日本型学校教育」というものがある。これは，2021年1月26日の中教審の「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」に出てきたものである。この「令和の日本型学校教育」は，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を目指しているところが特徴である。今回はそのうちの「個別最適な学び」について考え，情報科の授業実践を考えていきたい。

2. 究極の授業

さて，「究極の授業」と聞き，皆さんは，どのような授業を想像するだろうか。セミナーで登壇される有名教員の授業だろうか。それとも ICT をフル活用した授業だろうか。「すべての生徒が，授業の内容を理解し，その先に自らの課題を設定し，課題をクリアする授業」は「究極の授業」に近いかもしれない。そもそも「究極の授業」は誰にとっての「究極」なのであろうか。答えは簡単で，先ほど定義した授業は，生徒にとって「究極の授業」である。

私自身，20年以上教壇に立っているが，「今日の授業は完璧だったな。」という授業は一度もない。授業を受けた生徒全員に，授業の内容を“理解させること”が出来ないからである。授業の中心に教員がいる場合，“理解させること”といったように，生徒は受け身の授業になってしまう。生徒が自主的になることがあっても，主体的になることは難しい。では，「究極の授業」の具体はどんなものであろうか。

3.「究極の授業」≒「個別最適な学び」

「究極の授業」を「すべての生徒が授業の内容を理解し，その先に自らの課題を設定し，課題をクリアする授業」とするならば，今もっともそれに近い学びが「個別最適な学び」ではないだろうか[1)]。

「個別最適な学び」という言葉が独り歩きすることもあるのでお伝えすると，「個別最適な学び」は，「身勝手な学び」ではない。また，教員は，ひとりひとりの生徒が学ぶ方法をいくつか提示する必要があるが，教員が生徒ひとりひとりにあった学びを「あなたは，これ！」と伝えればよいというものではない。（そもそも「真にひとりひとりの生徒に合った学び」を伝えることが出来ないからである。それは，教員が生徒の考えていることを100％理解することが出来ないからである。）生徒が，「学ぶ方法と学ぶ内容を調整しながら学ぶ」。これが，「個別最適な学び」である[2)]。そのためには，生徒ひとりひとりが自分の「個別最適な学び」を見つけなければならない。

そもそもなぜ，「個別最適な学び」をする必要があるのだろうか。今までの様な授業での学びではいけないのだろうか。それは，「すべての生徒が，授業の内容を理解し，その先に自らの課題を設定し，課題をクリアする授業」を行うことで生涯にわたり学び続けられる人となってほしいと考えるからである。生徒には学びをジブンゴトとして捉えてほしい。そのために，学びに対して生徒自身に選択肢を与えることが必要だと考える。

4. 現状の教育現場での「個別最適な学び」

教育の理想を語ることは必要だが，理想と現実は常にかけ離れているものである。では，今の教育現場でどの様に「個別最適な学び」をすることが出来るのだろうか。先に述べた通り，生徒には，学びをジブンゴトとして捉えてほしい。そのために，生徒自身に選択肢を与えることが必要である。この選択肢とは，「学ぶ方法」と「学ぶ内容」を自分で調整していくことである。

「学ぶ方法」については，今までは教員が，黒板やスクリーン，モニターを使って，授業内容を説明することが多かった。「個別最適な学び」を考えたときに，「学ぶ方法」は多岐にわたる。例えば，教科書を読み，一人で単元を学ぶ生徒，クラスメイトと対話

しながら学ぶ生徒，教員の説明を聞いて学ぶ生徒，オンデマンドで学ぶ生徒など様々な学ぶ方法があり，その都度，生徒自身が個別最適な学びを選択すればよい。ただし，この条件として，他者の学びを侵害しないこと，この後に出てくる生徒自身が決めた「学ぶ内容」を理解することがある。

「学ぶ内容」については，学年ではなく，生徒本人の学習レベルに合った内容を学ぶのがよい。ただし，学年の壁を無くし，授業を実施することは明日からできるものではない。また，各授業には年間指導計画といったものがある。そうすると「学ぶ内容」をすべて生徒に調整させるのは難しい。そうなると，「学ぶ内容」の深度を生徒が調整できるようにするのが現実的である。ここで，ルーブリックのような形で生徒に学ぶ内容の深度を決めてもらえばよい。生徒によって，どこまで理解する必要があるのかを選択することが出来る。理想を語れば，すべての内容を理解し，問題が解けるようになればよい。

ただ，現状として，例えば，東京大学の入試問題（個別試験：「数学」の「数ⅠA」の範囲）をすべての高校3年生が100％解ける必要はないと私は考える。大事なことは，すべての生徒が，授業の内容を理解し，その先に自らの課題を設定し，課題をクリアすることである。「学ぶ内容」のその先に自ら課題を設定し，その課題をクリアするために，生徒ひとりひとりが深度を決めればよい。

5. 情報Ⅰにおける授業実践

では，情報Ⅰにおいて，どのような授業実践（1コマ分）が行えるかを紹介したい。

①各自の「授業到達点」と「学ぶ方法」をアンケートフォームで確認。生徒自身に選択肢を与え，本時をジブンゴトとして捉えるための宣言をしてもらう。

②生徒は，各自の学びをスタート。生徒は，ここから様々な「学びの方法」で進める。教科書や準拠問題集，参考書，タブレット端末を使う生徒もいる。YouTubeを視聴して学ぶ生徒もいれば，その単元を解説しているwebサイトを閲覧する生徒もいてよい。生徒の要望があれば，教員が10分弱の説明をしてもよい。

③25分経ったところで，グループになり，現在の自分の状況と学んだところを5分程度で共有する。生徒自身が学んできたことをアウトプットすることで，自分の中で学んだことを整理することができる。

④確認Quizで生徒が，自分の授業到達点を確認する。

⑤確認Quizの解説を生徒間で対話して理解を深める。一人で学びたい生徒は，教科書や参考書，Webを活用して理解する。

⑥最終確認で授業の到達点と振り返りを行う。授業開始で行った授業到達点に達したのか，「学ぶ方法」は，自分に合っていたのかを振り返り，到達点に達していないのであれば，次回の授業までに到達してくればよい。

この授業スタイルの大事なポイントは，1回で終わらせないことである。繰り返し行うことで，学び方や到達点に変化がみられる。さらに，生徒自身が学びに対して調整できるようになる。当然だが，365日いつでも学習モチベーションを維持することは難しい。体や心が元気な日もあれば，そうでない日もある。「そこは，よろしくやってください」というと軽く聞こえるかもしれないが，生徒は大人になるために「調整力」を身につけることも大切である。

6. おわりに

「個別最適な学び」を考えたときに，「学ぶ方法」と「学ぶ内容」を生徒が調整できるようにするには，生徒にとって，その科目がどれだけ生徒のキャリアに必要かということになる。多くの科目で第一回目の授業は，ガイダンスになるのではないだろうか。その授業で教員が，その科目が生徒のキャリアにおいてどのような影響を持つものなのかを様々な視点で語り，生徒とともに，生徒のキャリアにどのような影響を持つものなのかを探してほしい。そう考えると「個別最適な学び」を始めるための第一歩として，学習指導要領を生徒と一緒に読んでみてはどうだろうか。

参考文献

1）福本雅俊，「今後に求められる真の個別最適な学びの姿」，FORWARD 第87号，私学マネジメント協会，2024年

2）那須正裕・伏木久始，『「個別最適な学び」と「協働的な学び」』，北大路書房，2023年